

あけましておめでとうございます

新年早々、能登半島大地震、日航機事故と大惨事が相次ぎ、波乱の年明けとなりました。尊い命を奪われた方々には、心から哀悼の意を表します。

さて、今日から令和5年度の第3学期が始まりました。年号は2024年、令和6年です。毎年の事ですが、新しい年号には慣れたでしょうか。このことで一つ思い出したのが自分の年齢です。誕生日が来るたびに一つ加算されますが、これまた慣れるのに数日は要します。

いずれにせよ、新しい年がスタートしましたので、新しい気持ちで、まずは1月を頑張りたいと思います。

1月のさしあたっての行事はすみれ・さくら組さんの「かるた大会」です。子どもたちにとっては、冬休みの成果が問われるところですが、今日からでも遅くありません。大会当日まで、ご家族でかるたにいそしみましょう！

続いては「なわとび大会」です。（もも・ばら・すみれ組は長縄を跳んだりくぐったり。さくら組は前跳び。）これもかるた同様、冬休みの成果が問われるところですが、今日からでも遅くありません。大会当日まで、ご家族でなわとびにいそしみましょう！

思わず二度つかってしまった言葉「いそしむ」ですが、改めて意味を調べてみたら「一生懸命にする。はげむ。」とありました。私としては「親しみましょう」的な意味合いでつかったのですが、本来の意味が、やはり正しいと思います。

改めて、すみれ・さくら組の皆さん、かるたになわとびに、今日からさらにいそしみましょう！

しかし、しかし、かるたとなわとびだけではありません。同時にいそしまなければならないものがもう一つありました。それは、2月14日から行われる「どりーむコンサート」の練習です。「どりーむコンサート」は、卒業式は別として、令和5年度の最後の大きな行事です。さくら組さんにとってはそれこそ最後の大きな行事です。晴れ姿です。がんばりましょう！

「どりーむコンサート」が終われば、約1か月後は、卒業式、修了式です。

あっという間です。3学期は、1年（令和5年度）は。正に光陰矢の如しです。よって、一日一日を大切にきて来た行事に取り組んでいきたいと思えます。

「一日一日を大切に」で思い出したのがあります。それは、昨年末マイブームとなったのが『1リットルの涙』でした。これは、2005年にテレビで放送され、多くの方に知られるようになりました。テレビは、実話に基づくドラマでした。私としては、昨年末、ひよんなことから、再再再(?)放送のラスト2話を録画して視たのが「1リットルの涙」を知ったきっかけでした。実話に基づくということで、その後、それに関する本を購入しました。『1リットルの涙』という本。母親が書いた本。主人公が書いた手紙の本。

内容をネットから紹介します。

『1リットルの涙』は、15歳で原因不明の難病・脊髄小脳変性症を発病し、昭和63年に25歳の若さで亡くなった木藤亜也さんの自らの決心、自分への励まし、反省、感謝の言葉など、手が動かなくなるまで書き続けた日記をまとめたものである。

病気はどうして私を 選んだのだろう

“運命”なんていう言葉では かたづけられないよ

傷ついた分だけ優しくなれる 苦しんだ分だけ強くなれる だから私は絶対 逃げたりはしない
障害は不幸なんかじゃなく不便だけ

亜也は、21歳になった。もはや自由の効くものは何もない。病床で見舞う母にそれでも力を振り絞って、言うのだった。

「おかあさん、まだ生きたい・・・」

それから四年、木藤亜也、享年25歳であった。

亜也は言う、「ありがとう」

1 ページで終わろうと思ったのですが、時間ができましたので、今度は本からの抜粋です。『いのちのハードル 「1 リットルの涙」母の手記』（幻冬舎文庫 木藤静香 著）からです。

～

2 回目入院した藤田保健衛生大学病院へ、家族そろって出かけた時のことである。「家へ電話をかけたけれど駄目だった」～「途中で切れてしまったの……」と亜也はうつむいている。「どうしてかなア」しばらく沈黙が続いた。亜也の顔が赤くなり、大粒の涙がポトポト落ち始めた時、はっと気がついた。同時に背筋に冷たいものが走った。「ちょっと待っててね」急いでエレベーターで1 階まで降り、公衆電話に十円玉を入れた。ダイヤルを1 回だけまわす。そのまま受話器を耳にあてていた。5 秒くらい間をおくとツーツー音が入り切れてしまった。指先に力が入らず、ダイヤルを続けて回すことができなかったのだ。公衆電話の前でへなへなと座りこんでしまい、すぐには病室へはもどれなかった。つらいリハビリを人一倍頑張っている。頭痛、吐き気がする強い副作用にも耐えて注射をうけているのに、数日前までやれたことが今日はもうできないなんて……。この事実から次に何を生み出していったらいいのか。～

今日は帰る前に大事な話し合いが残されている。公衆電話の前に車イスを止め、ポケットから中細のサインペンをとり出し、逆にして亜也に握らせた。「ダイヤルの丸い穴に立たせて円にそって回してごらん」わが家の電話番号をゆっくりだが切れ目なく回すことができた。～「亜也、お母さんが今から問題を出すから答えなさいよ。学生のころ、難しい数学の応用問題が宿題に出されました。亜也はなかなか解けませんでした。困ってしまった亜也は、1、泣きました。2、自分の頭の悪さをなげきました。3、参考書を読んだりして何とか解こうと努力しました。4、あきらめて放り出しました。さて、1 から4 のうち、亜也のとった行動はどれですか。指を立てて答えなさい」何を言い出したのかとげげんそうな顔をしながらも、さっと、3 本の指が立った。「はい、“3 の努力しました” だよ。今でもその姿勢は変わりありませんか。それとも、4 に変わりつつありますか。」「3、です」

本題に入った。「指が思うように動かなくなって電話のダイヤルが回せなくなったこと。家族と話がしたかったけれど声も聞けなくてがっかりしたと思うけど、それでおしまいにするなら、答えは4 になってしまうよ。サインペンで実験したらやれたでしょう。これが3 の姿勢でしょう。できないことがあったら考えて、工夫してやってみること。知恵はいくらでもわいてくるんだよ。ただし、亜也の答えが1 や2 を通っても、最後の3 の気持ちにならなければ知恵の泉は涸れてしまうよね。1 本の指で駄目だったら指は5 本あるじゃない。右手が駄目なら両手を使えばいいよ」サインペンを使ってもダイヤルが回せなくなる日がいつかくるだろう。“できない” という障害に初めてぶつかった。障害との闘いは、言い換えれば自分との闘いである。これからの人生の最大の、重要な課題になった。今日の話合いが、今後の生活姿勢に根づいてくれることを願った。

～

「パッと咲くことのできなかつたわたしだけ、25 歳の娘です。美しくありたい。きれいな娘さんね、といわれたい。自分で自分の生き方を決めたい」と、私は亜也の気持ちをつかみとった。

～

20 歳の秋。今回の入院は、付き添いが必要となった。～亜也の胸の中は、病気の勢いに負けそうだった。将来のことを考えると不安で、どうにもならないほどふさぎ込んでいるのが表情からよみとれた。私は、何といて慰め、励ませばいいのか、言葉を探していた。しばらくして、亜也は私の方に顔を向けた。枕元のテーブルを指し、ノートとフェルトペンを求めた。このころは、鉛筆やボールペンで書くことができず、柔らかいフェルトペンを握りしめて書くのがやっとだった。30 分くらいかかって、大学ノートの1 ページにやっと書きとめると、きりっとした目を私に向け、ノートを差し出した。必死で書いたのに乱れた文字だった。でも、はっきりと判読できた。

「わたしは何のために生きているのだろうか」

～ 亜也の人生を総まとめにした言葉だった。私も思っていた。この子は病気で苦しむために生まれてきたのだろうか、と。いや、違う。そんなはずはない。だけど、このままだったら、一生懸命に勉強や苦手な運動をしてきたことが何一つ役に立つことなく終わってしまう。どんなに無念で悔しいことだろう。生まれてきてよかった。生きていてよかったと思える、自分の存在価値を見つけてやらなければ、亜也は生きる気力をなくしてしまう。それは何か。何かあるのだろうか。～